

世界の靴物語 ④

文・画 神奈川県企業博物館連絡会顧問 福原 一郎

アメリカ *saddle oxford* サドル・オックスフォード

流行を追うティーン・エージャーの少女からアイビー・リーガーの紳士までに愛されるサドル・シューズは、サドル・オックスフォード、またはサドル・ストラップ・シューズともいわれて1920年代の初めにアメリカ東部のニューイングランドに週末用の靴として登場した。

サドルとは馬の鞍くらのことで、紐付靴の甲の中央鳩目のある部分から甲をまたぐように革を切替えたデザインで、馬の背に鞍を置いたように見えることから名付けたものである。

爪先革と後革は同色を用い、サドル部分と後部の市革は異った色革を用いて2色のコンビネーションにしたスポーティな感覚から、1925年頃にはウイングチップや、モカシン・フロントと共にゴルフ・シューズに用いられるようになった。

1930年代中頃には大学生に好まれ、1940年代になって女子学生の間で折り返してくるぶし丈になるソックスと共にサドルシューズが流行となった。

第二次大戦が終り、敗戦後の日本にはアメリカ調のファッションがとり入れられ、駐留軍の家族やその関係者などが外出にサドル・シューズを履いていたので日本の若者の目にとまり流行した。

サドル・シューズのデザインは、昔水夫がデッキの上で履いた靴のようにシンプルで、甲の色は、白に茶、白に黒のようなコ

ントラストの強いものと、ベロア素材にスムース革のような質感の異なるものなどがあり、カジュアル・シューズの代表的なものである。

また黒や茶の1色のものは、プレーントウ・オックスフォードとしてスーツにも履かれる。底は革でグッドイヤー仕立か、合成ゴム、スポンジなどのセメント製法のものもある。

サドル・オックスフォードは、ヨーロッパでは見られないアメリカン・クラシックのオリジナルである。

メキシコ *huarache* ワラチ

メキシコの民族的な履物ワラチは、細い革紐を甲で交差させメッシュ状に編んだ開放的な踵の低いサンダルで、海外にも輸出されてリゾート用に履かれている。

ワラチが日本の「わらじ」(草鞋)と発音が似ていることについて、日本とメキシコとの国際交流史を永く研究されている大泉光一氏の著書「メキシコの大地に消えた侍たち」(2004-新人物往来社)の中に、17世紀初め伊達藩士支倉常長らの慶長遣欧使節団の一行として海外に渡りメキシコに残留した侍さむらいがいたことや、「ワラッチ」という革の履物を現地人が履いているという記述がある。「わらじ」との関係については確証がないとのことだが、大へん興味深いことである。

saddle oxford

サドル・オックスフォード



アメリカ

huarache

ワラチ



メキシコ